

研究室紹介

飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室

本調査室では、飛鳥・藤原地域の発掘調査で出土した木簡の整理・解読や、遺跡・遺物の文献による検討を主に担当しています。

ここ数年、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の手がけた発掘調査では、たくさんの木簡が出土しています。飛鳥池遺跡約8000点、藤原京左京七条一坊約13000点、石神遺跡1000点以上、藤原宮朝堂院5000点以上……。

木簡が出土する現場では、木簡の取りこぼしがないよう、土をコンテナにつめて持ち帰ります。その洗浄から私たちの仕事は始まり、木簡の整理・釈読・公表・保管という流れをたどっていきます。(奈文研ニュースNo.11の研究室紹介をご覧ください。)その具体的な仕事内容は、たいへん根気のいる仕事です。

飛鳥・藤原に都がおかれた7世紀は、律令国家が建設されてくる重要な時期にあたります。そのため、同時代史料である木簡には大きな期待がかかっています。古い時期の木簡であることから、しばしば「日本最古の○○」に関する史料となり、注目を集めたりもします。石神遺跡で出土した「日本最古の暦」の木簡は、記憶に新しいでしょう。

また、一見地味な木簡から、意外な事実が知られることがあります。写真の木簡は「(表)多土評難田(裏)海部刀良佐匹部足奈」と書かれており、7世紀段階に、後の讃岐国多度郡に「難田」(カタダ)というサトがあったことがわかります。空海の出身地を記した史料に「方田郷」(カタダノサト)がみえますが、まさに同じ地名でしょう。従来「カタダ」と記された古代史の史料は他に知られていなかったため、空海の出身地は「弘田郷」ではないかといわれてきましたが、再検討の余地がでてきたといえるでしょう。ちなみに、「佐匹」は「佐伯」のことです。空海が佐伯氏出身であったことが想起され、興味は尽きません。



(表)

(裏)

石神遺跡木簡 (飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹)

埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室

当研究室では、遺跡の発掘調査技術の向上や研究の進展、遺跡の保存活用に資する研究の一環として、第一に、官衙遺跡発掘調査法の研究を進めています。この研究では、古代官衙建物などの遺構や遺物の特徴等について分析し、それらの情報を遺跡から発掘し抽出する際の専門的知識や技術・留意点を明らかにすることを目指しています。研究成果の一部は、『古代の官衙遺跡 遺構編』、『古代の官衙遺跡 遺物・遺跡編』として刊行しています。掘立柱建物や礎石建物など官衙遺構の諸属性と特徴、発掘調査の手法、官衙関係遺物の特徴、各種の官衙遺跡ごとの特徴や類型などをまとめたものです。手引き書としても活用され、各地の官衙遺跡発掘調査や出土遺物観察の技術向上に寄与できればと期待しています。

第二には、古代の官衙・寺院・集落・豪族居宅等の遺跡の発掘調査成果から、文献名、建物遺構の諸属性、主要出土遺物の種類などのデータを収集し、データベース化する作業もおこなっています。これまでに遺跡数4,000件余り、文献数約18,000件、建物データ10,000件以上を収集しています。これらの情報を広く共有化するため、数年以内に奈文研ホームページ等で基礎的データが公開できるよう、最新データへの更新、データ追加、データベース構造の改良なども進めています。

第三には、官衙と周辺寺院との関係などを追求するため、ケーススタディとして鳥取県気高町上原遺跡群(因幡国氣多郡衙・寺院)の遺構・遺物の整理をおこない、その成果の一部を上原遺跡群発掘調査報告書(気高町2003年刊)としてまとめています。このテーマでは、瓦類などの分析を踏まえながら、郡衙周辺寺院の性格やその役割、郡領域と地方豪族の交通関係などについても研究を継続しています。

第四に、在地における律令国家支配のあり方を学的に考え、現状での研究成果や問題点を整理し公開普及することを目指して、古代官衙・集落に関する研究集会を毎年一度開いています。2003年度は「駅家と在地社会」をテーマに開催しました。2004年度は「地方官衙と寺院」について討議する予定です。

このほか、地方公共団体からの依頼に応じて、官衙・寺院遺跡等の発掘調査や保存整備活用等について指導助言する職務も重要な位置を占めています。

(遺跡調査技術研究室 山中敏史)